

数の数々

まず、文法上の数について見ていきましょう。

文法上の数を持つ言語、つまり単複の区別が必須の言葉には、印欧語族、セム諸語などのアジア・アフリカ語族、バントゥー諸語などアフリカ中南部のニジェール・コンゴ語族、南インドのドラヴィダ語族など文法上の性や名詞クラスを持つ言語に加えて、ウラル語族、テュルク諸語があります。

複数形が規則的に形成できる主な言語として、印欧語では、イタリア語は男性名詞は o→i、女性が a→eで、ルーマニア語も主格は同様ですが、中性があり複数で *ă* が付きます。これらはラテン語の複数主格を受け継いだものですが、スペイン語やフランス語は複数対格を受け継いで基本的に *-s* が付きます。英語の複数語尾 *-s* は、フランス語の影響ではなく、古英語の *-a* 語幹の複数主格 *-as* が中英語で *-es/-s* となり勢力を広げてきたものだそうです。ペルシア語では、人には *-ān*、ものには *-hā* を付けます。tālibān は tālib (学徒) の複数形です。

現代ヘブライ語では、男性名詞は *-im*、女性は *-ot* の複数語尾を取りますが、逆になるものもあるそうです。アラビア語には、男性で *-ūna*、女性で *-āt* という規則形がありますが、大部分は broken plural という不規則変化をし、そのタイプは数十種類あります。

名詞クラス型でも類別詞型でもない言語のうちでも、ウラル語族やテュルク諸語などは文法上の数をもっています。どちらも母音調和があるので語尾は大抵は2つ以上の形があります。フィン語では主格の複数には *-t* を付けますが、他の格(斜格)は *i* または *j* で表されます。兄弟語のエストニア語では主格は *-d* で、斜格は *-i* が付く形もありますが、フィン語とは違って *-d/-t* が付く形も揃っています。サーミ(ラップ)語もフィン語と同じようです。ハンガリー語では、*-k* が複数形の指標ですが、語幹が子音で終わる名詞には母音加わります。テュルク諸語のうちで、古くに分かれたチュヴァシ語では違う語尾を使っています(後に置き換わったものと言われています)が、その他の言葉はシベリアのヤクート(サハ)語を含めてトルコ語と同じ *-lar/ler* やその音便形を使っています。これらの言語は文法上の数が確立していると言えそうです。こうした言語では、名詞が複数形を取るだけでなく、それが主語の場合は(本来的には)必ず動詞も複数形を取ります。

韓国語では *-deul* が無生物にも自由に用いられます。日本でも最近では“歌たち”など非生物にも親愛の情を込めて“達”を使う用法が広がってきましたね(実は、古代にも“木ども(竹取)”や“船ども(伊勢)”など非生物に複数表示が使われていたそうです)。ベトナム語では *cac* (各) が複数表示に使われると聞きます。

モンゴル語では数の表示は必須ではありませんが、複数語尾として人に対する *-nar* と、*-d* および *-ood/uud* があります。

ツングース語に属する満洲語の複数語尾は *sa/se/so/si* ですが、親族名詞には *-ta/te* または *-ri* が付くそうです。因みに、清の(四等爵位)貝子 *beise* は元々王侯を示す貝勒 *beire* (三等爵位) の複数形と言われています。

タミル語では *-kal* を付けて複数形にすることができます。

他にも数詞や *some* などの数量形容詞を使わずに複数を表す手だてがあるのでしょいか。

日本語では“人々”、“山々”など重複によって複数を表すことができますが、決まった言葉しか使えず生産的ではありません。マレー語でも同様に *orang-orang* (人々)、*anak-anak* (子供等)、*jalan-jalan* (道々) など重複によって複数を表すことがかなり自由にできます。ただし、重複語の形をしていても *kupu-kupu* (蝶々)、*biri-biri* (羊) など特に昆虫・動物・植物には単数のものもあります。また、重複は複数を表すとは限らず、ニュアンスが変わったり (*orang-orang* 案山子、*anak-anak* 人形、*laki* 夫→*laki-laki* 男性、*banyak* 多い→

banyak-banyak とても多い、duduk 坐る→duduk-duduk ナンパする)、品詞が変わったり (hati 心臓→hati-hati 気を付ける、kira 思う→kira-kira ほぼ) します。また単なる重複以外に接頭辞や接尾辞を付けたものもあり、sayur 野菜→sayur-sayuran 野菜類やmerah 赤い→kemerah-merahan 赤味があった) など様々な働きをしています。ジャワ語でも同様に wong-wong (人々) といい、また動詞 (omah 家→omah-omah 所帯を持つ) や形容詞 (rupa 顔→rupa-rupa 様々な) になったり、様々なニュアンスを帯びたり (apa 何→apa-apa 何でも) します。また、述語形容詞を重複して主語が複数であることを示すこともできます。クメール語でも人間に限って sr̄ai sr̄ai (女達) と重複で複数を表すことができますが、特別の重複記号を使っていません。サモア語では部分重複によって複数を表すことができます。tamāloa (man) → tamāloloa マレー語などと同じ南島語族である台湾東南部のパイワン語にも重複はありますが、こちらは複数の形成には使われず、gade 山→gadegade 山頂、qatjuvi 蛇→qatjuvitjuvi 昆虫などニュアンスを変化させるのに使われているようです。

ハワイ語には複数を示す冠詞 nā があるそうです。単数は ka/ke です。

タガログ語では複数を表す場合、複数標示 mga (発音はmanga) を名詞の前に付けます。

数の話を続けると、単複の他に二つを表す双数を持つ言語があります。印欧語族の古典ギリシア語やサンスクリット、古代アイルランド語や古代教会スラブ語、ゴート語にあり、現代語でもスロベニア語、リトアニア語の一部方言などに残っているそうです。サーミ語 (ラップ語) やエスキモー諸語、アメリカ大陸の諸言語にも双数を持つものがあるようです。アジア・アフリカ(セム・ハム)語族の古典アラビア語や古代ヘブライ語にもあり、古代エジプト語やコプト語にもあったそうです。バーレーン al-Baḥrayn はアラビア語で baḥr (海) の双数、エルサレム Yerushaláyim もヘブライ語の双数形です。因みに、水はアラビア語で mā' ですが、ヘブライ語では mayim と双数形になっています。フォークダンスのマイム・マイムです。同じ語族のソマリ語にもあります。中期アイルランド語の後裔であるスコットランド・ゲール語にも双数は残っていますが、2 と一緒にのみ使用され、単数与格と同じ形だそうです。

古英語にも代名詞には wit (we two)、git (you two) と双数がありました。南島語族のタガログ語などのフィリピン諸語や、ハワイ語などのポリネシア諸語にも、一二人称の代名詞にだけ双数があります。フィジー語は人称代名詞に3人用の三数まであるそうです。

アラビア語の baqar は集合名詞 (牛群) で個々の牛 baqaraはその派生形です。shajar (木々) から shajara (木)、qamḥ (小麦) から qamḥa (小麦粒) など多数あります。jund (軍隊) から jundī (兵士)、さらにその複数形 junūd (兵士達) を作ることもできます。このように集合形が先にあってそれから出来た形を **singulative number** というそうで、こうした形は東スラブ語やウェールズ語にも見られます。ロシア語の гороx (豆) > горошина (豆粒)、ウクライナ語の пісок (砂) > піщина (砂粒)、白ロシア語の бульба (芋) > бульбіна (芋塊)、ウェールズ語の adar (鳥群) > aderyn (鳥)、coed (森) > coeden (木)、moch (豚群) > mochyn (豚) などがその例です。

スリランカのシンハラ語では、有生物名詞では単数形に -o/-u/-la を付けて複数形が得られるのに対し、多くの無生物名詞では複数形が基本でそれに単数形が接尾辞を付けた形になっており、後者は **singulative** と考えられます。

名詞クラスごとに単数形と複数形に別の接頭辞が付く、スワヒリ語などのバントゥー語は、単数形と複数形のどちらが基本ともならず対等な第三のタイプと言えます。

なお、数概念そのものではありませんが、一人称複数で聞き手を含む inclusive we (包括形) と含まない exclusive we (除外形) を区別する言語があります。ニューギニアの英語をベースとする混成語 (クレオール語) であるトク・ピシン語が分かりやすい例で、mi (<me、私)、yu-mi (<you-me、私達)、mi-pela (<me-fellow、私共) となっています。主なものは、南島諸語ならびにドラヴィダ諸語と、インド・アリア語のマラータ語、グジャラート語、ラージャスタン語、それにグルジア語、西アフリカのフラニ語です。中国語の我們は区別はありませんが、咱們は包括形専用に使われます (咱は“自家”の融合形)。ベトナム語には *chúng ta/chúng tôi* の区別があります (前者の *ta* は咱の越南音に由来するそうです)。身近な所ではアイヌ語にも *a-/ci-* の区別がありますが、アイヌ語では主格接辞および目的格接辞が動詞句に内包されるので、動詞変化でもこの区別がなされることとなります。英語でも *let's* は包括、*let us* は除外のニュアンスがあると言います。

日本語の「兄さん達」には兄が複数いる場合の他に兄とその他の人々を指すこともできます。これを近似複数というそうです。逆は同質複数で、朝鮮語の *deul* は同質複数しか指さず、近似複数には *deung* (など) を使います。モンゴル語の *-d* と *-uud/üüd* は同質複数ですが、*nar* は近似複数をも指し得るそうです。トルコ語の *-lar/ler* も近似複数指すことができます。

文法上の数をもつ言語でも、トルコ語やハンガリー語などは、数詞や *many* などの複数指示語があれば複数形の表示が不要になります。フィン語では、複数指示語がある場合、主格の名詞のみ単数分格となり、それ以外の格では数詞と名詞が複数形で当該の格を取ります。

Tur. *elmalar* (apples) *iki elma* (two apple) Hun. *almák* (apples) *két alma* (two apple)
 Fin. *omenat* (apples) *kaksi omena* (two apple) *omenoista* (of the apples) *monista omenoista* (of many apples)

モンゴル語、チベット語、ネパール語、タミル語やカンナダ語、マライ語などの南島語族では明確にする必要がある場合のみ複数標示を付けます。

中国語やチベット語、ビルマ語などのシナ・チベット語族、ベトナム語やクメル語などの南亞語族の多くは、本質的に名詞に複数形がないと言われています。

ただし、人称代名詞については、日本語を始めほとんどの言語で単複の区別が必須のようです。

スラブ語は数詞と名詞の関係に変わった特徴があります。ロシア語で見ると、1 は名詞の性 (男性・女性・中性の三種) に合わせて、*один, одна, одно* (*очки* 眼鏡のような複数形をとる名詞の場合は複数形 *одни*) という形をとりますが、2~4 の場合は名詞が単数生格 (所有格) の形になります。なお、2 *два* だけは一と同様に名詞の性に合わせて変化します。5 以上の場合は名詞が複数生格の形になります。つまり 5 以上の数は *a hundred of* と同様に名詞 (数名詞) として機能していることとなります。

	m (сантиметр cm)	f (деревня 村)	n (яблоко 林檎)	pl (сани 橇)
1	один сантиметр	одна деревня	одно яблоко	одни сани
2	два сантиметра	две деревни	два яблока	двое саней
5	пять сантиметров	пять деревень	пять яблок	пятеро саней
12	двенадцать сантиметров	двенадцать деревень	двенадцать яблок	двенадцать саней
22	двадцать <u>два</u> сантиметра	двадцать <u>две</u> деревни	двадцать <u>два</u> яблока	двадцать <u>двое</u> саней

ただし、21=20+1 *двадцать один* など 1 桁目が 1~9 の数 (合成数詞) は 1 桁目の数と同じ形になります。な

お、ポーランド語やチェコ語などでは合成数詞の場合も5以上と同じです。またブルガリア語では5以上も2～4と同じく名詞が単数生格の形をとるようです。(なお、千年前の古代ロシア語では11～19も *одиннадцать* <*один на десяте* (1 on 10) などと合成形であったので、1桁目の数と同じ形だったそうです。また3と4も性変化していました。)

バルト語でも類似の現象が見られます。リトアニア語では、2～9で名詞が複数形、1桁目0と11～19(単独形)では複数生格、21 (*dvidešimt vienas*) 以上の合成形では1桁目の数と同じ形になります。

命数法 (n進法)

フランス語に二十進法が残っているという話を聞いたことがありませんか。50は cinquante、60は soixante ですが、70は soixante-dix (60+10)、71は soixante et onze (60+11) …、80は quatre-vingts (4×20)、81は quatre-vingt-un (4×20+1) …、90は quatre-vingt-dix (4×20+10)、91は quatre-vingt-onze (4×20+11) … となっており、80台と90台に二十進法の名残りが残ります。最も完全なのはアイルランド語で、20 fiche、30 deich fichead (10+20)、40 daichead (2×20)、50 deich is daichead (10+2×20)、60 trl fichid (3×20)、70 deich is trl fichid (10+3×20)、80 cheithre fichid (4×20)、90 deich is cheithre fichid (10+4×20) となっており、ウェールズ語も同様ですが十九世紀になって十進法も導入されたとのこと。スコットランド・ゲール語や、バスク語、グルジア語も完全な二十進法です。

ブータンのゾンカ語は、20が k^{he}、400が j^{nieu}、8000が k^{hec^{he}} (大20)、160000が j^{ä:c^{he}} と上位も二十進法になっています。加えて、30が k^{he} p^{j^{he}}-da 'ji: (half to 20×2)、50が k^{he} p^{j^{he}}-da sum (half to 20×3) など奇数の十の位が半途法で表されます。現代では十進法による表現も作られているようです。なお、チベット語に親縁なので、1 chi、2 'nyi、3 sum、4 zhi、5 'ngaなど漢数字と似た発音になっています。デンマーク語も、40以降が二十進法である上に、50が halvtreds (half third)、70が halvfjerds (half fourth)、90が halvfems (half fifth) と半途法になっています。

英語などゲルマン諸語の11、12は13以降と作り方が違っていますが、祖形は*ainlif (one left)、*twalif (two left) で、dozen (<douze、フランス語の12) や grossとともに十二進法を反映したものとされます(十三以降は three-ten の形です)。-ty<-tig は古ゲルマン語で teguz (十個一組) の複数形 tigiwiz に由来するものとされ、twēntig>twenty 以下続きますが、七十になると hundseofontig と語頭に hund-が付き、この形が百 hundtēontig を越えて百二十 hundtwelftig まで続きます。この hund はもちろん hundred と同じですが、なぜ頭についているのかはさておき、古ノルド語の hundrað はキリスト教導入前は百二十を指していたようで、その後もこの意味で長く使われ、百と区別するために a long hundred と呼ばれていたそうです。つまり、十の桁も十二進法だったわけです。ナイジェリアには十二進法を用いる言語がいくつかあるそうです。また数詞ではありませんが、貨幣単位や計量単位には十二進法になっているものが多く、また十二支や黄道十二宮も十二進法によっています。

一桁目に五進法を使っている言葉もあります。クメール語では、1~5はそれぞれ muəj、pi:、bəj、buən、pram と言いますが、6は prammuəj と 5+1 の形になっており、以下 prampi:、prambəj、prambuən と 9まで同様です。西アフリカのウォロフ語も同じ仕組みだそうです。中米のナワトル語は上位も含めて完全な二十進法である上に、一桁目が五進法になっています。

もう一点、一桁目の後ろの方を「10まであと幾つ」といういわば減算、控除法で表している言葉があります。フィン語では8を kahdeksan、9を yhdeksänと言います(10は kymmenen)。1が yksi、2が kaksiなので 8=2 to 10、9=1 to 10 と言う言い方をしていることになります(-deksan の由来は不明)。エストニア語も全く同じです。インド・アリア諸語も二桁の数で9をこの言い方で表しています。例えばネパール語の数はヒンディー語よりは規則的ですが、11以降は egāra、bāhra、tehra と続いて18は aṭhāra となっているのに対し、19は unnāis で 20 bīs、21 ekkāis と似た語尾になっています。29は unantīs で 30 tīs、31 ektīs と同じ、39 unancālīs は 40 cālīs と、49 unanpacās は 50 pacās と、59 unansāṭhī は 60 sāṭhī と、69 unansattarī は 70 sattarī と、79 unāsī は 80 āsī と、89 unannabbe は 90 nabbe と、99 unansaya は 100 saya と同じ語尾になっています。他のインド諸語も同様ですが、この言い方が見られるのはベンガル語やマラータ語では89まで、ヒンディー語では79までで、その後は控除法でない通常の表現になっています。これらの言語の祖形であるサンスクリットでは一桁目の9について通常の言い方と控除法による表現が両方あるそうです。

アイヌ語は20を hotne-p、40を (2×20)、60を (3×20)、80を (4×20)、100を asiknehotne-p (5×20) という完全な二十進法ですが、それに加えて、8を控除法で2 to 10 (tupesan-pe)、9を1 to 10 (sinepesan-pe) と呼ぶとともに、二桁目も控除法で30を10 to 2×20 (wan-pe e tuhotne-p)、50を10 to 3×20、70を10 to 4×20、90を10 to 5×20と言っています。ヨルバ語も似ており、二十進法は途中の40からですが、一桁目の控除法は最も早く 5から始まっています。

一方、マヤ諸語の一つであるツォツィル語は、二十進法に基づいているとともに、11=buluchib (9+2)、12=lajcheb (10+2)、13='ox lajuneb (3+10) 以下19=balun lajuneb (9+10) までは同様に、20が j-tob、vinik が20の語根らしく40は cha'-vinik (2×20)、60は 'ox-vinik、80は chan-vinik、100は vo'-vinikと言い、21以上の中間の数は jun xcha'-vinik (1+2×20) などの形をとります。11と12の作り方が独特です。